

槐

かい

岡井省二創刊

令和2年4月号

令和二年四月一日発行 第三十巻第四号
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

巻頭三四六号（扉頁）四一四頁発行



熱き心

高橋将夫

霧 囲気がやはらくなる焚火かな
襟 卷の狐や己が尻尾噛む
襟 卷の狐女の味方する
寒 明けて山野も心身脱落す
寒 紅をひく唇に熱の花
大 寒の水の滴る男かな
三 寒の出会いひ四温の別れかな
手 袋をした手でボタン掛け違へ
これ以上燃ゆるものなし寒夕焼
闇 汁の中のカオスを掴みたり
寒 の水かぶつて熱くなる心

槐安集

加藤みき

渋滞や山に届きし初日影
隙間風かぜのこゑ聞く日なりけり
碑を守つてゐたる冬すみれ
焼かれずに膨らむでをる冬木の芽
かすみ草を大東にして祝ひたる

中島陽華

皺の足揃へ小春のハワイアン
寒晴の土人形の眼かな
冬至なる戸隠山の神戸牛
補聴器がまた駄々を云ふ小春かな
朝日より露団々の瞑想曲

近藤喜子

薺粥わが身ひとつを至宝とし
いつまでも地球かくあれ竜の玉
厚氷どうでも靴の割りたがる
龍神とつながる寒の水すくふ
湧き水のちよろちよると春待つてをり

瀬川公馨

逆鱗に触れてなんぼや鱈起し
新春の一区を走る鼠かな
寒満月張り合ふ者はなかりけり
音符の上にスタツカートや浮寝鳥
餅花や選手をつなぐ力水

竹内悦子

床の間に隼人瓜ある去年今年
年新た樟の大樹に額と手と
福引は三等なりし宵戎
したり顔の延廣禎一謡初め
出初式猫の尻尾のよく動く

雨村敏子

初日の出アラーの神も空海も
白紙に亀の文鎮初あかり
七種や大地の青さ両の手に
杉箸やうす紅色の粥柱
寒海鼠掬ひあげたる海図かな

柳川晋

多国籍の富を満載宝船
温暖化の先は氷河期寒やいと
人間の手応へが好き凧
ブルーハワイ舐める横顔ゆきおんな
おしくらまんぢゅう真中にゐる見知らぬ子

熊川暁子

初日の出無垢の風紋踏みて立つ
手まり唄聞えし頃の京街道
雪降らす天にも天の事始
水仙を包む汚職の新聞紙
太陽の解け出してゐる浮氷



江島照美

静かなる熟成の時牡蠣筏
寒柝の闇の幅まで伝へけり
残り福そこが頼みの急ぎ足
覗いては夜叉の写りし水面鏡
黒猫やホットワインに胸を焼く

岩下芳子

幸せが幸せ連れて初句会
其所此所にももの芽紅き主張かな
宇宙超へ瞬時に来たる年賀状
大和なる梅や桜の宝物
暖冬や眠らぬ熊の横切りし

寺田すず江

ひたすらによき年願ふ大旦
フェルメールの真珠のやうな寒の星
田平子や雀のをどり出す日和
人日やもろ鳥の声よく透る
寒梅の固き蕾のいのちとも

有松洋子

折平和
家家に水と火のある大旦
初明り鳥より先に嬰のこゑ
聖マリア産まれくる子に毛糸編む
雪の朝紅茶にジャムをたつぷりと
寒雲がバベルの塔に巻きつきぬ

岩月優美子

転んでも滑つてみても初日の出
寒月や心の紐を引き締める
楊貴妃の容に白き落椿
まだまだこれからよ真冬の五体なり
侘助や時にはしたき大笑ひ

竹中一花

まばたきの奥にありけり春愁
日と星を連れて巡るや歳徳神
神カミ山に元朝の日のゆきわたる
タンカーの日の丸冬の湾を出る
三日はや脳の錆止め探しをる

近藤紀子

歯朶飾る葉先の向きを正しつ
朝日影南天の實の粒揃ひ
目で追ひぬ青き弾みの龍の玉
女正月夢の話に笑ひけり
大寒の夜半駆けて来る又三郎

前田美恵子

入口は熊野古道よ雉子の声
小寒や鰐口の音響みたる
人生に後戻りよし小春かな
如月の名刺を受くる指白し
大寒の深淵碧を沈めたる

中田禎子

寒木瓜や雀日和となりける
水底の黒を深めて山眠る
初風の瑠璃光浄土船帰る
冬鹿や一刀彫に猩々緋
竜宮や鯛やうつぼの女正月

吉田順子

ひとりごと生きる術なり初暦
闇動くもの一つに冬木の芽
今少し無言でいたき日向ぼこ
水底の見えるはるけし寒日和
下萌ゆるここから童話生れさう

槐市集

庄司久美子

雲 走る 防風林と葱畑
膝を立てがりをガリガリ雪女
恋猫も鈴を鳴らして神頼み
赤軸の蒨稜草や長恨歌
山茶花のうふうふうよ金平糖

杉原ツタ子

日のいろを集めて一輪福寿草
歳旦の火のいろ深し雅言
灯台へ寄する潮ややぶ椿
七種や切株にある日の光
叡山を越えゆく一日ゆりかもめ

高野昌代

故里の新酒に冠せし「山頭火」
千年の京洛漬けしや大蕪
新ウイルスコロナウイルス門外不出に春節祭
明けゆくはボレロのリズム祝祭日
七人の敵も丸呑み新年会

竹村淳

底冷えの奈良の仏の薄ごろも
ドル紙幣まざる都会の初社
産土神の炎に投ぐる注連飾り
親達の見上ぐる炎吉書揚
北風も遊び相手に子等下校



田中 信行

一筆の琵琶湖周遊冬うらら
銀幕のトラさん恋し年惜しむ
鴨五羽のONETEAMなり湖の朝
東山三十六峰 小夜時雨
確かなるリアルの世界初日の出

田中美恵子

茅葺きの家に住みけり嫁が君
凍蝶に差してきたりし朝日影
湯湯婆やコーラルピンクに包まるる
ひとけなき家に咲きけり紅椿
朧夜や菩薩のごとく母のゐる

時澤 藍

生真面目に縁起担ぎて三箇日
神主の飛ばすジョークや初笑ひ
大方は天に任せて去年今年
雪吊や手持無沙汰の大あくび
生国の冬に欠かせぬ水羊羹

中 貞子

朝まだき法螺貝響動む初御空
木の家を好みて栖むや嫁ヶ君
導いてくれし道あり初あかり
さらさらと若き師匠の初講座
梟に会ひし気配の無音かな

中島昌子

青畳に日の差してをる淑気かな
賀状来る鼠百匹家中に
財産は無きが気楽よ年酒酌む
お降りや新しき傘開きける
顔見せる姫ばかりなり恋歌留多

中西厚子

手を休め窺ふ農夫冬の客
冬ざるる無音の中で音を聞く
飼い主に駆け寄る猫や年明くる
旅先に自国の言葉聞く冬日
酷寒や事実は小説より奇なり

槐 集

高橋将夫 選

頭陀袋にあふるる記憶去年今年 枚方 阪倉 孝子

街路樹の一糸纏はぬ年始 守口 三木 亨

神棚へ初夢預け湯浴みする
海鳴りへ色深めをり竜の玉
恵方道心開けば灯しける
貝寄風や遙かな浄土運びくる
徘徊の母の手握る去年今年

芦屋 田中 信行

初空に見果てぬ夢を描いてみる
人の世の段差に寒波けつまづき
時として正義は粗暴道凍つる
花びらの総意で落ちる寒椿
若冲の群鶏鳴くや初御空

大阪 藤田美耶子

温かき寒さもありて屋台酒
マドンナも鬼籍に入りて冬銀河
GOHNSNGGONEと赤坂あたり除夜の鐘
雪女口説けば溶ける性哀し
天窓に天狼在す天龍寺

大阪 平野 多聞

寒行の裸身つつまる神の息
冬青空風となりたる子らまぶし
炭おこし忘れ昭和を遠くせり
七草を摘む喜びを知らぬまま
大寒や影も小さくうづくまる

出利葉 孝

往生は円く逝きたし鏡餅
上がりなき人生双六道祖神
初明りの滲む産湯に浸りたし
船魂は帆柱あたり注連飾る

無機質な町を煽るや空つ風
ごそごそと大地くすぐる雪割草
鬼やらひ纏れた糸に鉈を振る
城 風 北 風 屯 風 の 街

銀河往来

神棚へ初夢預け湯浴みする 阪倉 孝子
よほど嬉しい初夢だったのだろう。それを神棚に預けて湯浴みする心境はなんともうらやましい限り。

〈頭陀袋にあふるる記憶去年今年〉患方道心開けば灯しける〉
〈貝寄風や遙かな浄土運びくる〉の句からもまたのびやかで広やかな心境が伝わってくる。

以上、どの句にも心の豊かさが溢れている。

ゴリンゴリンと赤坂あたり除夜の鐘 田中 信行

除夜の鐘のゴーンというオノマトペをGOHNSN、GONEとアルファベットで表記する手法は誰も思いつかなかったであろう。実に俳諧味のある時事句ではないか。

〈雪女口説けば溶ける性哀し〉〈温かき寒さもありて屋台酒〉は男心の一面を見事に捉えていて共鳴する。

〈徘徊の母の手握る去年今年〉は切実な現実。

往生は円く逝きたし鏡餅 平野 多聞
誰もがかくありたいと願うところで、季語の鏡餅がよく効いている。

〈上がりなき人生双六道祖神〉〈初明りの滲む産湯に浸りたし〉
〈船魂は帆柱あたり注連飾る〉はいずれもこと、ものの本質に迫る精神の風景。

〈天窓に天狼在す天龍寺〉は句の姿がよい。

花びらの総意で落ちる寒椿 三木 亨
椿は花びらが一枚ずつ散るのではなく花全体がポトリと落ちる。それを「花びらの総意」で落ちると見たところがいかにこの作者らしい。

〈人の世の段差に寒波けつまつき〉、〈時として正義は粗暴道凍つる〉は人種差別、宗教紛争、イデオロギーの対立など人の世の矛盾と軋轢を真摯に見つめている。

寒行の裸身つつまる神の息 藤田美耶子

寒行の水を浴びた肌から湯気がたっているのであろう。それを神の息が包んでいると見た。まこと、厳しさの中にいたわりを見る思いがする一句。

〈冬青空風となりたる子らまふし〉〈七草を摘む喜びを知らぬまま〉にも人の世を見つめるやさしい眼差しがある。

〈若沖の群鶏鳴くや初御空〉はまことにめでたい。

大寒や影も小さくうづくまる 出利葉 孝

「影も小さくうづくまる」で寒さが一層厳しく感じられる。

〈無機質な町を煽るや空つ風〉〈城嵐北風屯風の街〉は昔の城下町の今を現代的な視点で捉えている。

底冷えの奈良の仏の薄ごろも 竹村 淳

仏の衣はもともと薄いだけに、奈良の底冷えがひしひしと伝わってくる。

〈門松や八十路の旅に身振ひす〉、〈見えねども見えぬあたり〉に冬銀河は作者の八十路の旅の精神の風景。